

ヘッセにおける水死の象徴性

—— 発展段階との関係性 ——

平 井 昌 也

ヘルマン・ヘッセの数多くの作品で「死」というモチーフが扱われているのだが、本稿で取り上げたテーマは「水死」である。物質の四大元素の一つたる「水」と死の結び付きには極めて重要な意味が込められており、この問題について主人公が水死を迎える小説に沿って考察を進めたのであるが、その小説とは年代順に列記すると、『車輪の下』(Unterm Rad 1904)、『クラインとヴァーグナー』(Klein und Wagner 1919)そして『ガラス玉遊戯』(Das Glasperlenspiel 1942)の3作品である。これら三つの作品の主人公の水死が有する意味を解明していくには、先づそれぞれの物語の死の場面で水が果たしている役割、つまり水の象徴性が明らかにされねばならない。そしてそこで得られた結果から水の象徴性が作品によって様々に異なっていることが明白となり、またそれに応じて水の中での死の意味も変化していることが理解されるが、また3作品の成立年代に目を向けると興味深い一致点が見出だされる。即ち、三つの作品は各々作者の生涯の初期、中期、後期に属しており、ヘッセの三つの発展段階においてそれぞれ1人水死という最期を遂げる主人公が現れている点である。この注目すべき事実から、水死の3例は詩人の自己発展の諸段階を色濃く反映したものと考えられ、逆に死の意味を解明することによって彼の発展の経過をうかがい知ることができるのである。

『車輪の下』の主人公である少年ハンスの最期は川での死であり、川とは彼にとって特別な空間を意味するのであるが、なぜならこの自然の場所は過酷な受験戦争にさらされている彼に安全を保障する逃げ場所となり、また心身の疲労を取り除いてくれる唯一の慰め手にもなるからである。結

末の場面に描き出されている少年の亡骸を抱く川はまさしく子を胸に抱くやさしい母を連想させるものであり、それゆえここでの水は慈悲深き母を象徴しており、また水の中に身を委ねているのは母の胎内で羊水に保護されている状態を暗示し、故に彼の水死は苦難からの救済であると言える。だがそのような肯定的な意味合いとは裏腹に彼の結末は単なる現実逃避だとも断言できる、そのわけは主人公は決して自ら困難に立ち向かうことなしに、死という現実逃避を行っているからである。

このような死の否定的側面は作者の当時の姿勢を反映している。ヘッセもこの主人公と同様に挫折を繰り返した少年期を送り、その後やっと念願の詩人になることができ、それによって安定した生活も手に入れることができたのだが、しかしのちに彼が述懐する通り、それも一過性の偽りの安定であった。つまり、彼によれば当時やっとの思いで手に入れた平穩にあぐらをかいていたというのである。そのような詩人の現実に対する消極的な姿が主人公の最期に写し出されており、それゆえハンスの死は感傷的な自然への回帰という印象を与えるものになってしまっている。

『クラインとヴァーグナー』の主人公クラインは湖で投身自殺を図るのであるが、彼は死の直前に生成を繰り返す原初の根源的のイメージを見て、生と死は不断に繰り返される神の一呼吸に過ぎないこと、そして死はもはや不安と恐怖の対象ではなく再生に連がるものであることを悟る。ここで水も母を連想させるものであるが、しかしそれはハンスにおけるやさしい母という一面的なものとは全く異なり、生あるもの全てを呑み込んで吐き出す恐ろしい母であり、心理学的には「太母」(Große Mutter)と説明されるものである。人は生まれ変わらんとするなら、一度この母の体内に取り込まれ、死という恐怖を体験しなければならないが、そうすることによって再生が約束されるのである。ここで水は死と再生を促す豊饒なイメージをもち、他方湖は新たな生命を産み出す母胎の象徴だと言える。

水のこのようなイメージの変化はヘッセの心境の変化に一致する。彼は第一次世界大戦という決定的な体験を通じて自分のそれまでの安穩たる生活ぶりを顧みざるを得なくなり、その結果偽りの安定を脱却するためにそれまでの自己を否定し、過去を清算しなければならなくなった。そしてそ

れまでの古い世界を打ち壊し新しい世界を再構築しようとしたのであり、その決意がクラインの死に表現されている。彼の死は単なる現世的生の終わりではなく再生を期したものであり、彼の水への投身はより高い世界への発展の跳躍を意味しているのだ。主人公の死は過去の詩人自身の死であり、生まれ変わろうとする彼の姿の投影であるのだ。

だが再生が果たされなければ、死そのものも結局無駄死にであったと断ぜざるを得ないのであるが、その答えは次の水死に譲られる。

『ガラス玉遊戯』の主人公クネヒトの水死の象徴性を解くには、水のイメージからだけでは迫り切れない。それは彼の最期の場面には水のイメージの他に火のイメージが付与されているからであり、この二つの物質の結び付きを探求していくことで水死の意味を解明することができよう。

クネヒトは教育州カスターリエンで音楽名人として自己発展を遂げるに至ったのだが、やがて彼は、物質面を否定し精神性にのみ重点を置く教団に没落の予兆を感じとり、精神と自然の調和を計るべく教団を去り世俗世界に赴く。そこで彼はチートーという名の少年を見出し、彼の中に自分の目的の実現を目指すのだが、それに取りかかろうという矢先に少年と共に湖に入った彼は、火のような水の冷たさを感じながら死を迎える。

バジュラルルによれば水と火ほど強力な生殖者は他になく、それは水の豊饒性の比ではない。そしてこの極めて多産な結合によって産み出されたものこそクネヒトの後継者チートーである。水から上がった彼はクネヒトが脱いだマントで冷えた体に暖を取りながら自己の果たすべき使命を明確に認識する。ここで見落とされてはならないことは音楽名人の熱（火）が少年に移されたことであり、それによって名人は自分が持っているものを彼に伝え、そして対極世界の融和はその後継者が果たしていくことになるのである。このように自己の使命を果たしたクネヒトは完全な死を死ねたと言える。一方、再生を期してクラインが入水した湖から、新しい世界を創造していく若い血を宿らせた少年が生まれ出たことは、ヘッセの発展の成果を示している。クネヒトとチートーの死と生は、詩人の生まれ変わりと絶え間ない発展の連続を示すものなのである。